

## 5-5 水質

本事業では、土地の改変に伴って、下流側の公共用水域に濁りの影響が想定されることから、水質に係る調査、予測及び評価を実施した。

### 5-5-1 現況調査

既存資料の収集・整理を行うとともに、対象事業実施区域からの雨水排水が流入する水路、河川の現況を把握し、予測に係る基礎資料を得るため現地調査を実施した。

#### 1. 調査すべき情報

調査すべき情報を表 5-5.1 に示す

表 5-5.1 調査すべき情報

調査すべき情報	
流れの状況	流量
水質の状況	環境基準項目（生活環境項目、健康項目）、ダイオキシン類、濁度
降雨の状況	降雨量

注) 健康項目及びダイオキシン類は、冬季及び夏季調査に実施した。

#### 2. 調査手法

調査手法を表 5-5.2 に示す。

表 5-5.2 調査手法

調査すべき情報		調査手法
流れの状況	流量	日本産業規格 K 0094 に定める方法
水質の状況	環境基準項目（生活環境項目、健康項目）	「水質汚濁に係る環境基準について」（昭和 46 年環境庁告示第 59 号）に定める方法
	ダイオキシン類	「ダイオキシン類による大気汚染、水質汚濁（水底の底質汚染を含む。）及び土壌汚染に係る環境基準について」（平成 11 年 12 月環告第 68 号）に定める方法
	濁度	日本産業規格 K 0101 に定める方法
降雨の状況	降雨量	最寄りの雨量観測所の観測データを収集し整理する方法

### 3. 調査地域及び調査地点

調査地域は、対象事業実施区域からの雨水排水が流入する水路及び河川とした。

調査地点は、対象事業実施区域からの雨水排水が流入する水路において、干瓜川への合流点手前の2地点とした。調査地点は、干瓜川との流量差を把握するため、水路の上流側と下流端とした。また、干瓜川合流後の流れの状況を確認するために、干瓜川1地点において流量を調査した。

調査地点を表 5-5.3 及び図 5-5.1 に示す。

表 5-5.3 調査地点

No.	調査地点	備考
St. 1	干瓜地区内水路	水質及び流量
St. 2	金山地区内道路側溝	水質及び流量
St. 3	干瓜川 St. 1 水路合流後の地点	流量のみ調査

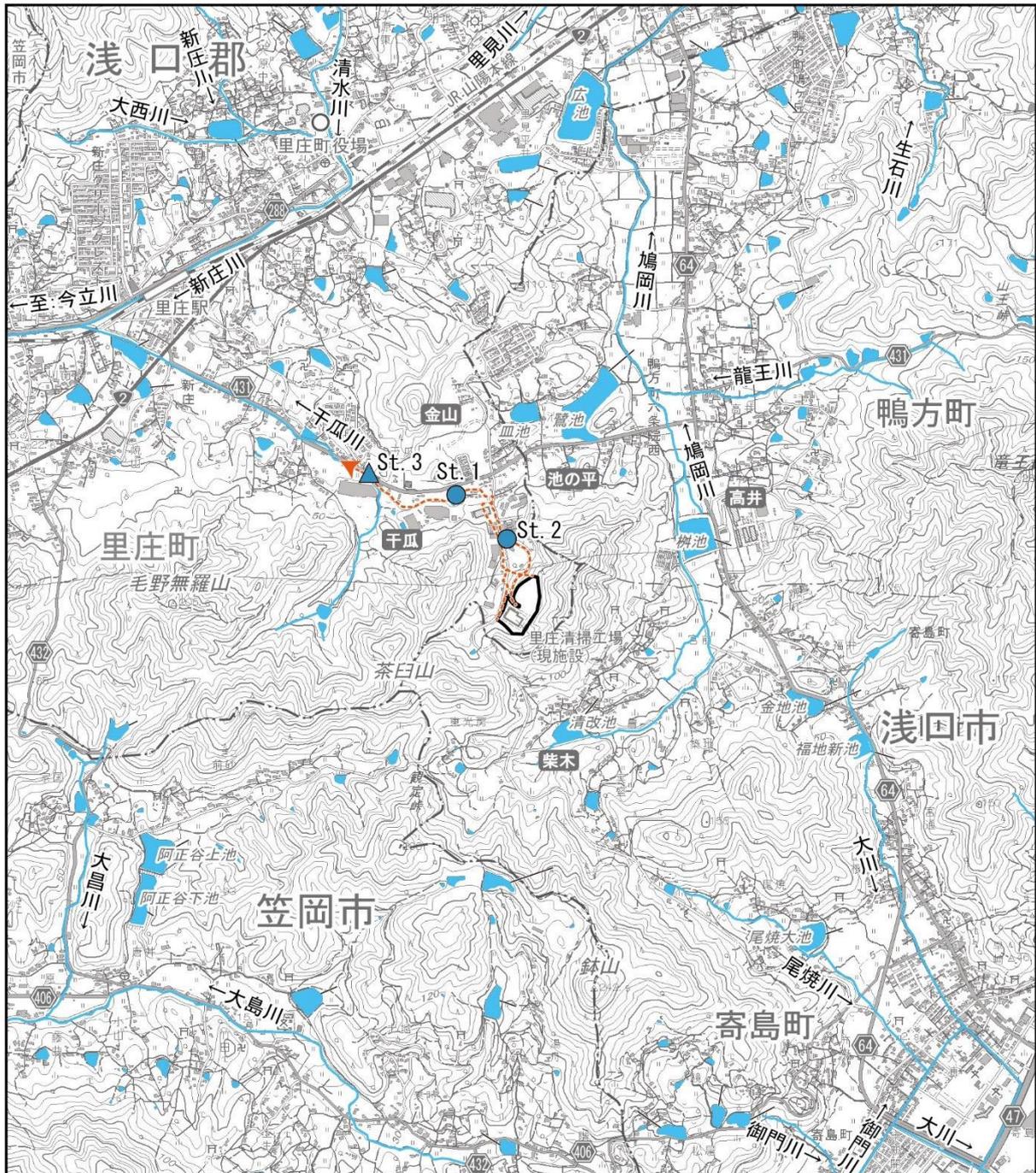
### 4. 調査期間等

調査期間を表 5-5.4 に示す。

調査期間等は、調査地域における水質に係る環境影響を予測・評価するために必要な情報を適切に把握できる期間等として、平常時の河川水質は四季に各1回、降雨時の河川水質は年2回とした。

表 5-5.4 調査期間等

項目	調査期間	備考
平常時の河川水質 (環境基準項目：生活環境項目・健康項目、ダイオキシン類)	秋季：令和2年11月4日(水) 冬季：令和3年1月21日(木) 春季：令和3年4月16日(金) 夏季：令和3年8月3日(火)	健康項目及びダイオキシン類は冬季及び夏季で調査を実施
降雨時の河川水質 (浮遊物質、濁度)	1回目：令和3年8月13日(金) 2回目：令和3年11月8日(月)	—



凡 例



対象事業実施区域

— 河川

■ ため池

← 主な雨水排水ルート

● 水質調査地点  
(流れの状況、水質の状況)

▲ 水質調査地点  
(流れの状況)



SCALE 1 : 25,000

0 0.5 1.0km

この地図は、国土地理院発行の数値地図 25000 をもとに作成した。

図 5-5.1 調査地点位置図

## 5. 調査結果

### (1) 平常時の河川水質

河川水質の調査対象地点のうち、St.2は、四季のいずれも水が流れていない状況であった。

水が確認されたSt.1の水路における河川水質の調査結果を表5-5.5に示す。

調査対象の水路は環境基準の類型指定はないが、流入先河川の今立川について、「笠岡市の環境保全（令和3年度）」（令和3年、笠岡市）では、D類型を参考として環境の保全に係る評価を行っていることを踏まえ、D類型と比較した。その結果、冬季の生物化学的酸素要求量（BOD）が環境基準値を上回った。また、大腸菌群数の値も高いことから、当該地点においては生活雑排水が流入している可能性が考えられた。

その他の項目においては、いずれも環境基準を満足していた。

表 5-5.5 調査結果 (St.1)

項目	単位	秋季	冬季	春季	夏季	定量 下限値	環境基準		
生活環境項目	水素イオン濃度 (pH)	—	7.3 (25℃)	7.5 (25℃)	7.5 (25℃)	7.1 (25℃)	—	6.0~8.5	
	生物化学的酸素要求量 (BOD)	mg/L	1.0	9.9	5.9	3.6	0.5	8 以下	
	浮遊物質 (SS)	mg/L	2	6	2	6	1	100 以下	
	溶存酸素量 (DO)	mg/L	9.1	10.8	8.9	7.4	0.5	2 以上	
	大腸菌群数	MPN/ 100mL	13000	220000	49000	240000	1.8	—	
	亜鉛	mg/L	0.008	0.020	0.009	0.009	0.003	—	
	ノニルフェノール	mg/L	ND	ND	ND	ND	0.00006	—	
直鎖アルキルベンゼンスルホン酸及びその塩	mg/L	0.0006	0.030	0.025	0.016	0.0006	—		
健康項目	カドミウム	mg/L		ND		ND	0.0003	0.003 以下	
	全シアン	mg/L		ND		ND	0.1	検出されないこと	
	鉛	mg/L		ND		ND	0.005	0.01 以下	
	六価クロム	mg/L		ND		ND	0.02	0.05 以下	
	砒素	mg/L		ND		ND	0.005	0.01 以下	
	総水銀	mg/L		ND		ND	0.0005	0.0005 以下	
	アルキル水銀	mg/L		ND		ND	0.0005	検出されないこと	
	ポリ塩化ビフェニル	mg/L		ND		ND	0.0005	検出されないこと	
	ジクロロメタン	mg/L		ND		ND	0.002	0.02 以下	
	四塩化炭素	mg/L		ND		ND	0.0002	0.002 以下	
	1,2-ジクロロエタン	mg/L		ND		ND	0.0004	0.004 以下	
	1,1-ジクロロエチレン	mg/L		ND		ND	0.002	0.1 以下	
	シス-1,2-ジクロロエチレン	mg/L		ND		ND	0.004	0.04 以下	
	1,1,1-トリクロロエタン	mg/L		ND		ND	0.0005	1 以下	
	1,1,2-トリクロロエタン	mg/L		ND		ND	0.0006	0.006 以下	
	トリクロロエチレン	mg/L		ND		ND	0.001	0.01 以下	
	テトラクロロエチレン	mg/L		ND		ND	0.0005	0.01 以下	
	1,3-ジクロロプロペン	mg/L		ND		ND	0.0002	0.002 以下	
	チラウム	mg/L		ND		ND	0.0006	0.006 以下	
	シマジン	mg/L		ND		ND	0.0003	0.003 以下	
	チオベンカルブ	mg/L		ND		ND	0.002	0.02 以下	
	ベンゼン	mg/L		ND		ND	0.001	0.01 以下	
	セレン	mg/L		ND		ND	0.002	0.01 以下	
	硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素	mg/L		4.2		4.7	0.01	10 以下	
	ふっ素	mg/L		0.09		0.09	0.08	0.8 以下	
	ほう素	mg/L		ND		ND	0.05	1 以下	
	1,4-ジオキサン	mg/L		ND		ND	0.005	0.05 以下	
	—	ダイオキシン類	pg- TEQ/L		0.084		0.20	—	1 以下

注) 1. 「ND」は定量下限値未満であったことを示す。

2. 水質汚濁に係る環境基準の見直しが行われ、令和4年4月より、六価クロムについては基準値が0.02mg/L以下に、大腸菌群数については大腸菌数に変更されている。ただし、現地調査の実施時期は環境基準の見直し以前であるため、上表では現地調査実施時の環境基準値を示し、比較を行った。

## (2) 平常時の河川流量

河川流量の調査地点のうち、St. 2 は、四季のいずれも水が流れていない状況であった。

水が確認された St. 1 及び St. 3 の流量の調査結果を図 5-5.2 に示す。

St. 1 の流入先である St. 3 の流量は、St. 1 の流量に比べ秋季は 6 倍、冬季は 40 倍、春季は 15 倍、夏季は 4 倍程度多い状況であった。

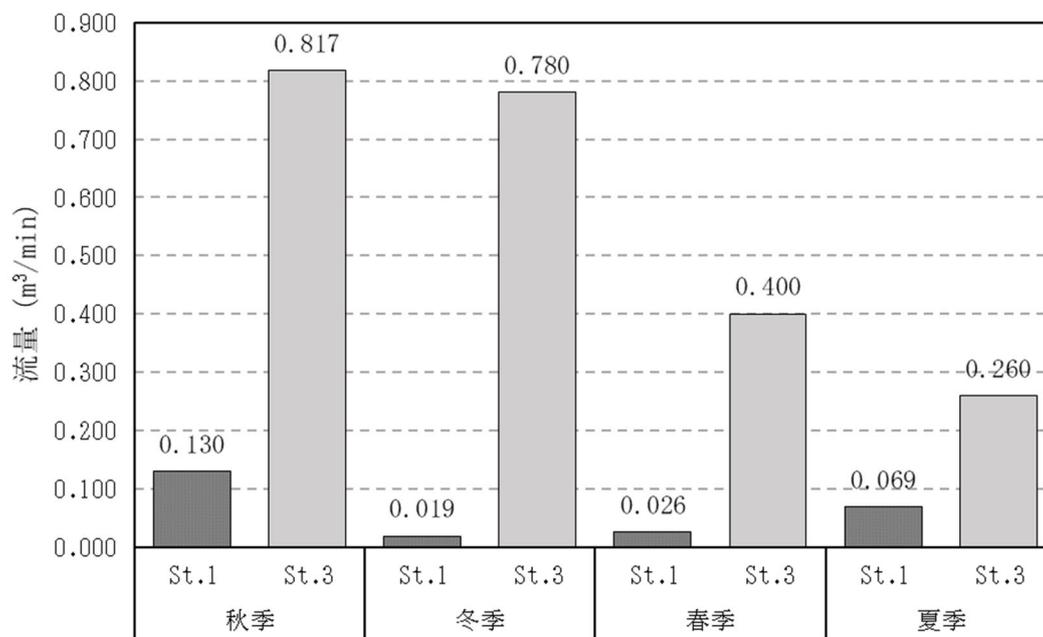


図 5-5.2 流量調査結果

### (3) 降雨時の河川水質・流量

降雨時の河川水質及び流量の調査結果を、表 5-5.6(1)～(3)、表 5-5.7(1)～(3)、図 5-5.3 及び図 5-5.4 に示す。

表 5-5.6 (1) 調査結果 (St.1 1回目)

調査時間		水温	透視度	浮遊物質量	濁度	流量
		℃	度	mg/L	度	m <sup>3</sup> /min
1回目	①10時14分	24.2	35	14	13	0.921
	②11時14分	24.0	9	62	37	1.98
	③12時12分	24.5	18	27	31	1.91
	④13時14分	24.3	55	7	11	0.946
	⑤14時12分	24.9	43	15	12	1.69

表 5-5.6 (2) 調査結果 (St.2 1回目)

調査時間		水温	透視度	浮遊物質量	濁度	流量
		℃	度	mg/L	度	m <sup>3</sup> /min
1回目	①10時00分	24.5	11	47	42	0.087
	②11時00分	24.3	8	92	80	0.30
	③12時02分	24.3	10	29	33	0.42
	④13時02分	24.0	74	3	7	0.25
	⑤14時01分	24.0	29	19	20	0.27

表 5-5.6 (3) 調査結果 (St.3 1回目)

調査時間		流量
		m <sup>3</sup> /min
1回目	①10時40分	8.81
	②11時33分	17.6
	③12時30分	11.9
	④13時29分	8.15
	⑤14時01分	9.55

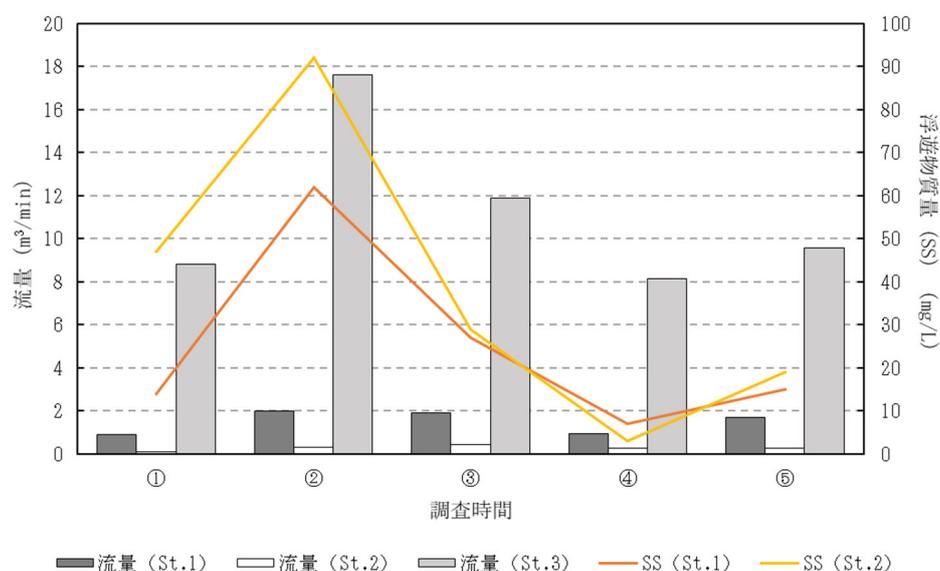


図 5-5.3 地点間の比較 (1回目調査結果)

表 5-5.7 (1) 調査結果 (St.1 2回目)

調査期間		水温	透視度	浮遊物質量	濁度	流量
		°C	度	mg/L	度	m <sup>3</sup> /min
2回目	①19時50分	17.9	34	43	26	0.247
	②20時35分	17.5	6	160	120	2.06
	③21時37分	17.0	8	100	77	2.25
	④22時38分	17.0	11	44	56	1.61
	⑤23時38分	16.9	11	42	53	2.03

表 5-5.7 (2) 調査結果 (St.2 2回目)

調査期間		水温	透視度	浮遊物質量	濁度	流量
		°C	度	mg/L	度	m <sup>3</sup> /min
2回目	①19時35分	18.0	47	41	18	0.013
	②20時28分	17.5	2	260	360	0.17
	③21時28分	17.0	5	150	210	0.30
	④22時29分	16.8	9	50	77	0.14
	⑤23時30分	16.8	12	50	68	0.26

表 5-5.7 (3) 調査結果 (St.3 2回目)

調査期間		流量
		m <sup>3</sup> /min
2回目	①20時10分	2.19
	②20時48分	8.43
	③21時48分	28.9
	④22時46分	12.0
	⑤23時48分	14.6

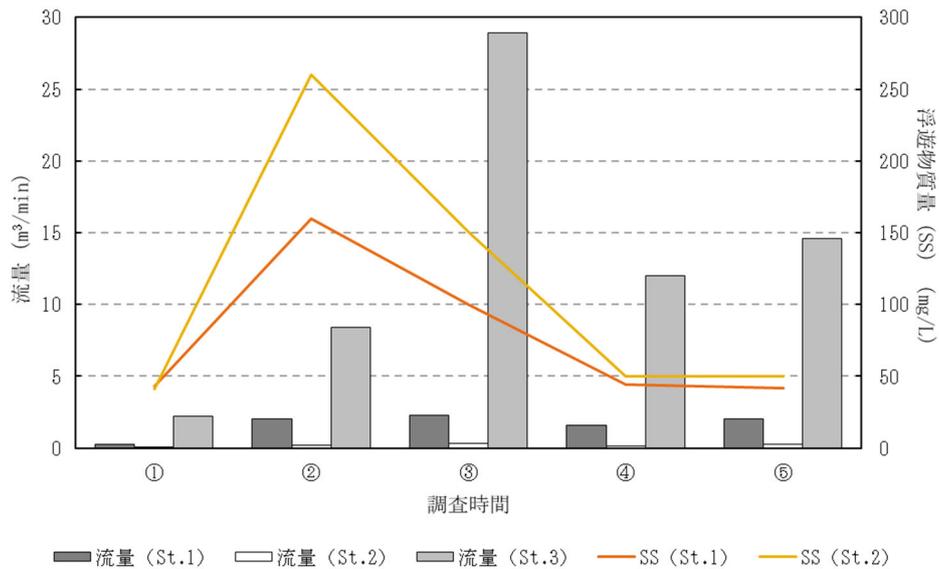


図 5-5.4 地点間の比較 (2回目調査結果)

## 5-5-2 予測及び評価の結果

### 1. 土地の改変に伴う水質の影響（工事の実施）

#### （1）予測

##### 1) 予測内容

工事の実施に伴い、対象事業実施区域の下流域への雨水排水による浮遊粒子状物質の影響について予測した。

##### 2) 予測地域及び予測地点

予測地域は、対象事業実施区域からの雨水排水が流入する水路及び河川として、調査地域と同様とした。予測地点は、予測地域における水質に係る環境影響を的確に把握できる地点とし、調査地点と同様の地点とした。

##### 3) 予測対象時期

予測対象時期は、土地の改変による浮遊物質に係る環境影響が最大となる時期とした。

##### 4) 予測の基本的な手法

浮遊物質の収支に関する計算、事例の引用または解析により予測する手法とした。

#### ア. 予測手順

工事の実施により発生する濁水の予測手順は、図 5-5.5 に示すとおりである。

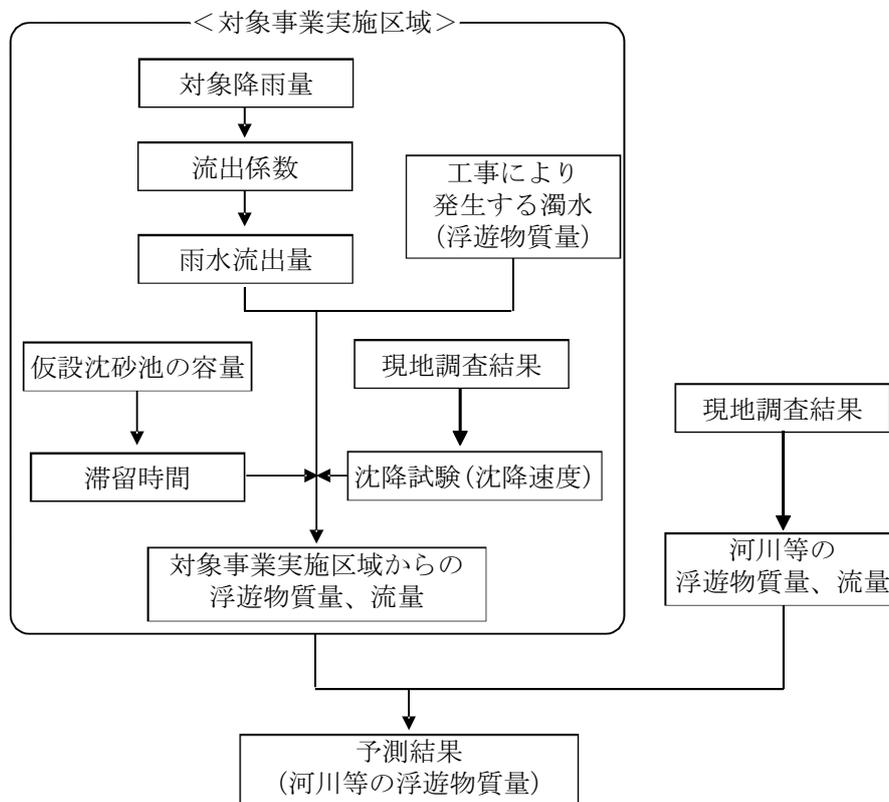


図 5-5.5 工事の実施に伴う濁水による影響の予測手順

## イ. 予測式

予測は、「道路及び鉄道建設事業における河川の濁り等に関する環境影響評価ガイドライン」(平成 21 年、環境省)に基づく完全混合式とした。

### (ア) 仮設沈砂池への流入量

$$Q_0 = a \cdot R_f \cdot f / 1000$$

ここで、 $Q_0$  : 濁水の流入流量 (m<sup>3</sup>/h)  
a : 濁水発生部分の面積 (m<sup>2</sup>)  
Rf : 時間雨量 (mm/h)  
f : 流出係数 (表 5-5.8 参照)

表 5-5.8 流出係数の設定

種類	流出係数	備考
対象事業実施区域を含む 造成裸地	0.5	「面整備事業環境影響評価技術マニュアル(Ⅱ)」(平成11年、面整備事業環境影響評価研究会)を基に設定

### (イ) 濁水濃度と経過時間の関係

現地で採取した土壌サンプルを用いて沈降試験を行った結果(図 5-5.6 及び図 5-5.7 参照)によると、残留率に大きな差はなかったが、5 分後以降の残留率が大きい南側の土壌の沈降試験結果を用いて、造成裸地から発生する濁水濃度(SS)と経過時間の関係を以下の式に近似した。

$$C_t = 594.86 t^{-0.394}$$

ここで、 $C_t$  : 予測濃度 (t 時間経過後の SS 濃度) (mg/L)  
t : 仮設沈砂池での滞留時間 (分)

### (ウ) 完全混合式による混合後の SS 濃度の算出

$$C = \frac{C_0 \times Q_0 + C_1 \times Q_1}{Q_0 + Q_1}$$

ここで、C : 合流後の河川等の浮遊物質量 (mg/L)  
C<sub>0</sub> : 混合前の河川等の浮遊物質量 (mg/L)  
C<sub>1</sub> : 対象事業実施区域からの浮遊物質量 (mg/L)  
Q<sub>0</sub> : 混合前の河川等の流量 (m<sup>3</sup>/s)  
Q<sub>1</sub> : 対象事業実施区域からの放流水の流量 (m<sup>3</sup>/s)

表 5-5.9 沈降試験結果（対象事業実施区域 北側）

経過時間 (t)	SS (C <sub>t</sub> )	残留率		沈降速度 (V)	水面から採取 口までの距離
		C <sub>t</sub> /C <sub>0</sub>	%		
min	mg/L	C <sub>t</sub> /C <sub>0</sub>	%	cm/min	cm
0	1,900	0.950	95.00	—	95.0
1	420	0.210	21.00	91.80	91.8
2	380	0.190	19.00	44.30	88.6
5	320	0.160	16.00	17.08	85.4
10	250	0.125	12.50	8.22	82.2
30	160	0.080	8.00	2.63	79.0
60	110	0.055	5.50	1.26	75.8
120	75	0.038	3.75	0.61	72.6
240	53	0.027	2.65	0.29	69.4
480	36	0.018	1.80	0.14	66.2
1,440	24	0.012	1.20	0.04	63.0
2,880	18	0.009	0.90	0.02	59.8

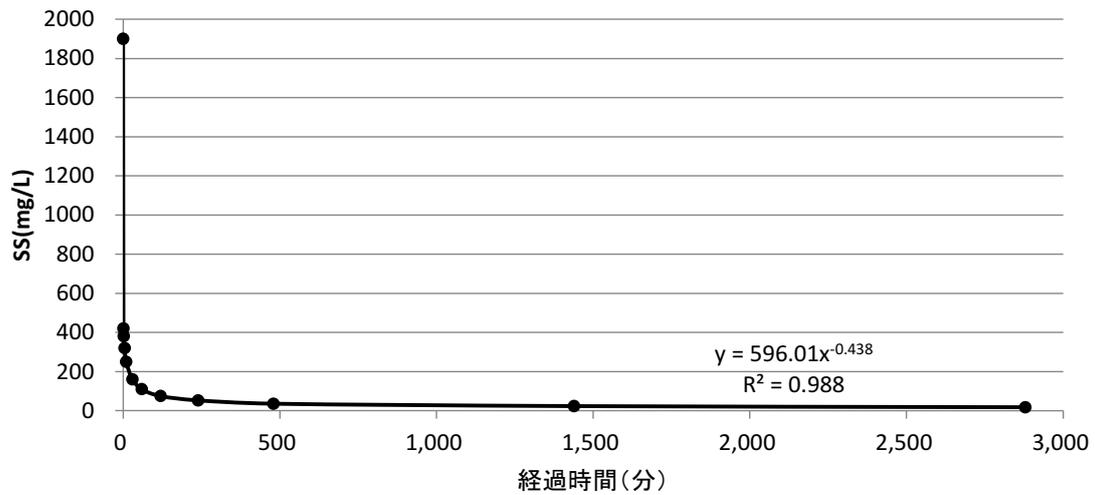


図 5-5.6 残留率の推移（対象事業実施区域 北側）

表 5-5.10 沈降試験結果（対象事業実施区域 南側）

経過時間 (t)	SS (C <sub>t</sub> )	残留率		沈降速度 (V)	水面から採取 口までの距離
		C <sub>t</sub> /C <sub>0</sub>	%		
min	mg/L	C <sub>t</sub> /C <sub>0</sub>	%	cm/min	cm
0	2,000	1.000	100.0	—	95.0
1	360	0.180	18.00	91.80	91.8
2	360	0.180	18.00	44.30	88.6
5	340	0.170	17.00	17.08	85.4
10	280	0.140	14.00	8.22	82.2
30	190	0.095	9.50	2.63	79.0
60	130	0.065	6.50	1.26	75.8
120	95	0.048	4.75	0.61	72.6
240	62	0.031	3.10	0.29	69.4
480	52	0.026	2.60	0.14	66.2
1,440	33	0.017	1.65	0.04	63.0
2,880	25	0.013	1.25	0.02	59.8

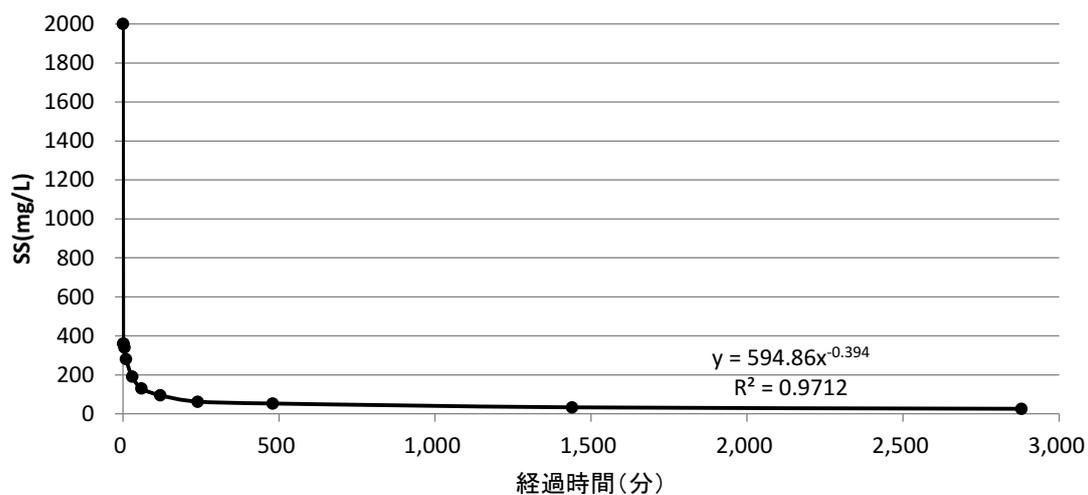


図 5-5.7 残留率の推移（対象事業実施区域 南側）

## ウ. 予測条件

### (ア) 集水域

濁水の集水域は改変区域面積として、1ha (10,000m<sup>2</sup>) とした。また、改変区域から発生する雨水は全量集水し仮設沈砂池から放流することとした。

### (イ) 降雨条件

笠岡気象観測所における過去 10 年間の日降水量の状況は、表 5-5.11 に示すとおりである。これによると、過去 10 年間で 1mm/日以上 of 降雨日数は 898 日、平均値は 13.2mm/日、上位 5% 値は 46.5mm/日であった。そこで、予測においては、日常的な降雨だけではなく大雨を対象として、上位 5% 値の 46.5mm/日を基に 50.0mm/日を降雨条件とした。

表 5-5.11 笠岡地域気象観測所の過去 10 年間の日降水量の状況

地域気象観測所	1mm/日以上の 降雨日数 (日)	日降水量 (mm/日)			
		平均値	中央値	上位 5% 値	最大値
笠岡	898	13.2	7.5	46.5	158.0

注) 統計期間は、2011 年～2020 年の 10 年間とした。

### (ウ) 濁水発生条件

造成裸地から発生する濁水条件は、「面整備事業環境影響評価技術マニュアル(II)」(平成 11 年、面整備事業環境影響評価研究会) を基に 2,000mg/L とした。

### (エ) 仮設沈砂池出口で目標とする濁水濃度

造成裸地から発生する濁水濃度の目標は、流入先の今立川で参考としている類型 (河川 D) の環境基準値 100mg/未満とした。

### (オ) 負荷量の流入先の水質、流量の設定

濁水の影響が最大となるケースを想定し、平常時の調査結果に基づいて、流量は最低流量を、SS 濃度は最大値を現況値として設定した。設定した予測条件を表 5-5.12 に示す。

表 5-5.12 河川流量と SS 濃度の設定

No.	予測地点	河川流量 (m <sup>3</sup> /min)	現況 SS 濃度 (mg/L)
St.1	干瓜地区内水路	0.019	6

注) 河川流量及び現況 SS 濃度は、St.1 における冬季の調査結果の値を示す。

## 5) 予測結果

### ア. 濁水流出量及び濁水濃度

表 5-5.13 に示すとおり、濁水濃度 (SS) と経過時間の近似式から、目標濁水濃度まで濁水中の濁りが沈降するために必要な時間は約 95 分、仮設沈砂池必要容量は 16.5m<sup>3</sup>と予測された。

本事業では、表 5-5.14 及び図 5-5.8 に示すとおり仮設沈砂池を設置する予定である。仮設沈砂池の容量は 45m<sup>3</sup> であり、仮設沈砂池必要容量 16.5m<sup>3</sup> を十分に満足する規模であることから、目標濁水濃度を満足する適切な濁水の処理が可能であると考ええる。

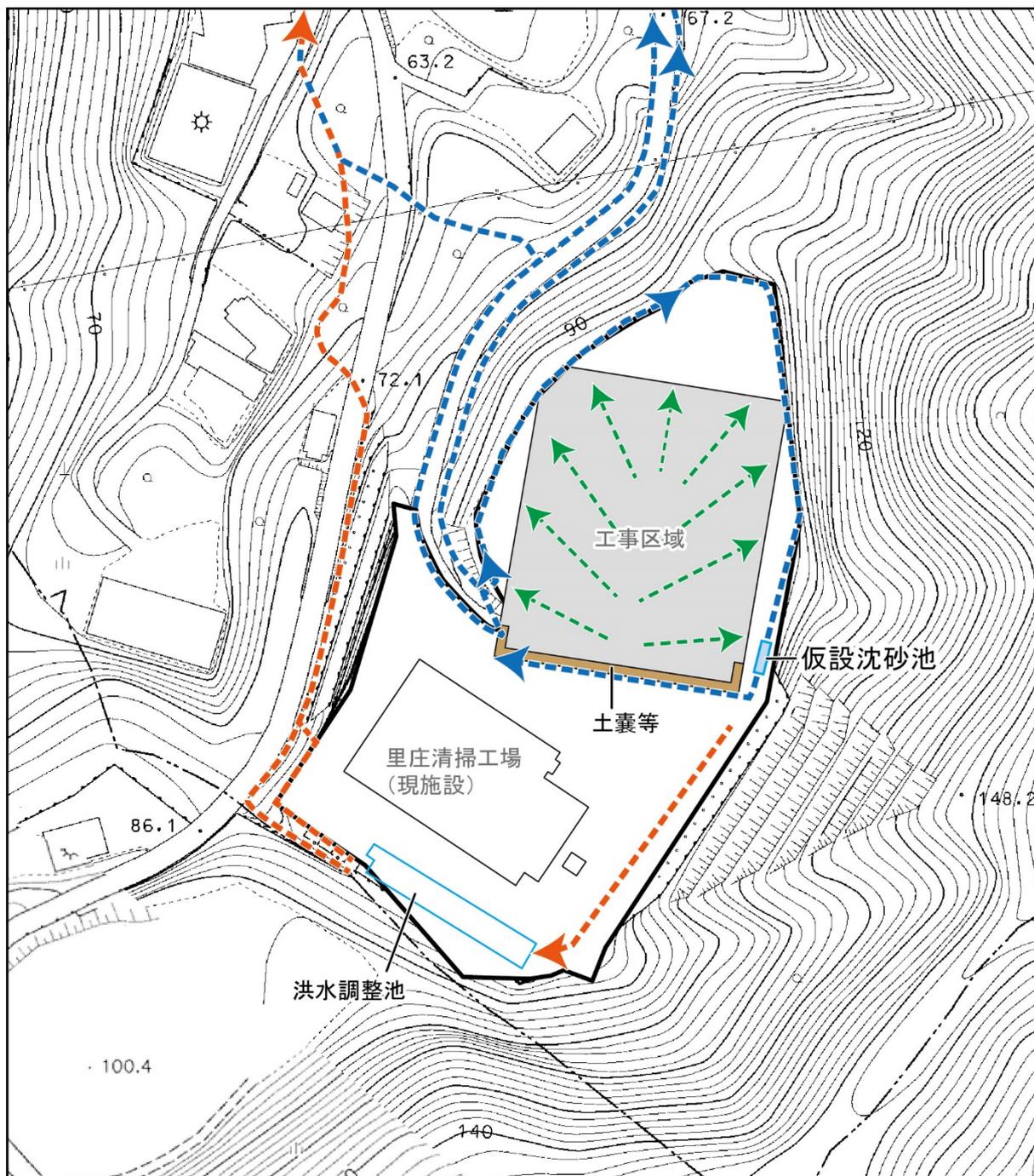
なお、予測に用いた降雨条件は 50mm/日としたが、設置予定の仮設沈砂池の容量は 45m<sup>3</sup> であり、これは、降雨量 130mm/日にも対応可能となる容量である。

表 5-5.13 仮設沈砂池の必要滞留時間及び必要容量の予測結果

流出量	目標濁水濃度	必要滞留時間	仮設沈砂池必要容量
10.4m <sup>3</sup> /h	100mg/L未満 (99mg/L)	95分	16.5m <sup>3</sup>

表 5-5.14 仮設沈砂池の規模及び構造

規模	構造
面積：幅 3.0m×長さ 10.0m 深さ：1.5m	底板：捨てコンクリート 側壁：簡易山留め

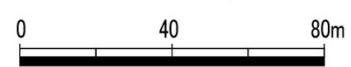


凡 例

-  対象事業実施区域
-  現施設周辺の主な雨水排水ルート
-  計画施設周辺の主な雨水排水ルート
-  工事区域の雨水排水の流れ
-  仮設沈砂池 (容量: 45m<sup>3</sup>、幅 3m × 長さ 10m × 深さ 1.5m)



SCALE 1 : 2,000



この地図は、里庄町都市計画図及び浅口市都市計画図をもとに作成した。

図 5-5.8 仮設沈砂池の設置位置図

## イ. 河川等における濁水濃度

河川等の水質（SS 濃度）予測結果は、表 5-5.15 に示すとおりである。

予測の結果、St.1 における SS 濃度は、89.7mg/L と予測された。

さらに、St.1 の流入先である干瓜川における現地調査結果の降雨時の流量と比較すると、St.1 の流量は 0.2%程度であり極めて小さい。

表 5-5.15 濁水濃度の予測結果

No.	予測地点	現況 SS 濃度	現況 流量	濁水 SS 濃度	濁水 流出量	予測 SS 濃度
		mg/L	m <sup>3</sup> /h	mg/L	m <sup>3</sup> /h	mg/L
St.1	干瓜地区内水路	6	1.14	98.9	10.4	89.7

表 5-5.16 干瓜川における降雨時の流量

調査期間		流量		調査期間		流量	
		m <sup>3</sup> /min	m <sup>3</sup> /h			m <sup>3</sup> /min	m <sup>3</sup> /h
降雨時 1 回目	①10 時 40 分	8.81	528.6	降雨時 2 回目	①20 時 10 分	2.19	131.4
	②11 時 33 分	17.6	1056.0		②20 時 48 分	8.43	505.8
	③12 時 30 分	11.9	714.0		③21 時 48 分	28.9	1734.0
	④13 時 29 分	8.15	489.0		④22 時 46 分	12.0	720.0
	⑤14 時 01 分	9.55	573.0		⑤23 時 48 分	14.6	876.0
	平均	11.20	672.1		平均	13.2	793.4
備考	日降水量 55mm（笠岡地域気象観測所）		備考	日降水量 33mm（笠岡地域気象観測所）			

## (2) 環境保全措置

### 1) 事業計画上実施することとしている環境保全措置

土地の改変に伴う水質の影響を回避または低減するため、以下に示す環境保全措置を講じることとしている。

- ・ 仮設沈砂池の設置：日常的な降雨に伴う造成区域からの濁水の流出については、放流前位置に仮設沈砂池を設け、濁水の土砂を沈降させて上澄水を放流することにより下流域への濁水の影響を低減する。
- ・ 濁水の監視：工事中の濁水の流出状況については濁度計を用いて日常的な監視を行い、濁水の流出が認められた場合は作業の調整または対策を行う。
- ・ 著しい降雨時の土工事対応：著しい降雨時には土工は極力避け、濁水の発生を抑制する。

## (3) 事後調査

水質の影響予測で採用した予測手法は、その予測精度に係る知見が十分に蓄積されているものであり、予測の不確実性は小さい。採用する環境保全措置についても不確実性は小さいと考えられる。また、St.2 下流水路には定常的に水が流れておらず、降雨時の雨水排水側溝としてのみ機能している現状であり、降雨時の濁水流出量は、下流の干瓜川の降雨時の流量の0.2%程度と寄与率が極めて小さい。このことから、事後調査は実施しない。

#### (4) 評価

##### 1) 評価の手法

###### ア. 環境影響の回避・低減に係る評価

対象事業の実施による土地の改変に伴う水質の影響が、事業者により実行可能な範囲でできる限り回避または低減されているかについて評価した。

###### イ. 環境保全に関する施策との整合性に係る評価

土地の改変に伴う水質（濁水）の影響について、「水質汚濁に係る環境基準について」に示される環境基準を環境保全目標として設定し、予測結果との間に整合性が図られているかについて評価した。環境保全目標を表 5-5.17 に示す。

なお、対象水路及び下流の干瓜川は環境基準の類型指定がなされていない。なお、干瓜川流入先の今立川では、「笠岡市の環境保全（令和3年度）」（令和3年、笠岡市）において、D類型（浮遊物質量：100mg/L以下）を参考として環境の保全に係る評価を行っていることを踏まえ、これを環境保全目標とした。

ただし、浮遊物質量の水質の環境基準については、公共用水域が通常の状態に適用されるものであり、本来は降雨時には適用の範囲外である。

表 5-5.17 環境保全目標

類型	項目	基準値
D	浮遊物質量（SS）	100mg/L

出典：「水質汚濁に係る環境基準について」（昭和46年12月28日環境庁告示第59号）

##### 2) 評価結果

###### ア. 環境影響の回避・低減に係る評価

調査及び予測の結果、並びに前項に示す環境保全措置を踏まえると、土地の改変に伴う水質の影響は、環境保全措置を講じることにより、回避または低減がなされるものと考えられる。

以上のことから、土地の改変に伴う水質の影響については、事業者の実行可能な範囲内で回避または低減が図られているものと評価する。

###### イ. 環境保全に関する施策との整合性に係る評価

土地の改変に伴う水質（濁水）の予測結果は、表 5-5.18 に示すとおりである。

予測結果は、降雨時で 89.7mg/L と予測され、環境保全目標を満足することから、環境保全に関する施策との整合性が図られているものと評価する。

表 5-5.18 土地の改変に伴う濁水の予測結果

予測地点	予測 SS 濃度	環境保全目標
St.1 干瓜地区内水路	89.7 mg/L	100 mg/L